資料６

2050年の地域社会－空間像、社会像、人間像－　ストーリー例

（1）空間像〔例〕

① エコ･ハビタットの創生－森に憩い、森で暮す（働く）「もりびと」たちのコロニー・コミューン形成

30 年後のストーリー

長きにわたり「たんばの森づくり」に培われた豊かな森は、もっと有効に、もっと楽しく活用できるようになっている。森の中でエコな暮らしができるコロニーがあり、たんばコミューンが形成されている。

ツリーハウスのシェアハウスに住まい、バイオエネルギーで暮らしている。仕事はオンラインと農業や林業の「半農半 X」で暮らし、空飛ぶ車で出かけ、オンライン授業やオンライン診療も充実し、森の中だけで悠々自適に暮らせる。

AI による獣害対策が功を奏し、森の動物とも共生している。

暮らす森の近くには、広場や湖もあり、子どもたちも森と広場を行き来しながら元気に遊んでいる。森にはハイジブランコやハンモック、アスレチックなど自然のものを活用した遊び道具が豊富にあり、木を容易に使える工作室もある。それを教えているのは100歳になるおじいちゃん。昔ながらの肥後守を使って、器用に木を削り、木工芸品を作っている。　（385字）

生業・生産の場（資源、エネルギー源）としての森の再生・復活が実現－木質バイオマスによるエネルギー自給率 100%達成

30 年後のストーリー

ドローン等の航空レーザー測量や立体動画や過去の空中写真、森林簿や森林計画図などあらゆる森林情報がデジタル化され、これに登記情報や住基ネット等の所有者情報からAIが森林境界確定を確定している。VRにより高齢者や不在村者等も現地に赴く必要もなく、相続者の追跡など煩雑な事務手続きもAIが行うようになり、丹波の里山の地籍がほぼ確定された。

また、小規模所有林を公有化し里山を資源採取の場として公的管理している。里山沿いの耕作放棄地で早生樹によるバイオマス生産も行われている。AIやGPS技術により無人機械が里山等から計画的にバイオマスを採取し、その結果、かつて大正・昭和の薪炭採取の次代同様に、里山が尾根まで見通せるバッファーゾーン化し野生鳥獣との棲み分けの場となっている。農地、河川、道路の草刈りも自動化され、今まで分解し炭酸ガスを放出していた植物系のゴミを産廃ではなく全て資源として回収収集している。

また、少子高齢化で限界集落が自然消滅し順次整理され、小学校区 1 集落レベルに集約された。この集約集落レベルで、里山から供給されるバイオマス燃料を利用し、安定的に発電や熱供給のバイオマス施設が稼働し、エネルギー自給率 100%を達成している。老朽化したインフラの再構築時に熱導管設置し熱を公共施設や住宅へも供給している。木材を建築材料としてではなく、電気と熱の形に代え、誰もが無意識に使っている。

AI化され人々は働くことがほとんど無くなり、ベーシックインカムの時代となり、人々は里山をフィールドにしたアクティビティーを楽しんでいる。チェーンソーによる立木伐採などかつて危険で敬遠された人力作業を楽しむなど、一部過去への回帰も見られるようになった。

（714字）

KPI：再生可能エネルギーによるエネルギー自給率 80%

③集落をまるごとテーマ・コミュニティ（趣味人特区）に転換（「（住まないで）働く（遊ぶ）集落」の出現）

30 年後のストーリー

丹波は超高齢化し、人口減少から限界集落が増えて無人地帯化した広大な土地を利用して、アスリートの練習場を建設。村全体をアスリート村として遠方からもトレーニングに来る場所となる。アスリート村は、体調管理もでき、自動で健康チェックがされたり、栄養管理された食事が提供される。トレーニングルームでは、AI によるアドバイスがされ、トレーニング後のケアも自動でなされる。世界から一流アスリートが訪れ、地元小学生とのふれあいの機会や直接指導を受ける機会もある。栄養管理に使われる地元食材が世界から注目され、滞在経験のあるアメリカ選手が定期購入するようになっている。

また別の村はミュージシャンの練習場が充実し、志を一にする者が切磋琢磨している。屋内施設も充実し、足りないパートはオンライン参加やロボット演奏が参加。星空の下の屋外ライブが頻繁に開催され、ドライブイン方式でも開催できると人気になっている。オンラインでセッションした世界的ミュージシャンが訪れ、地元ライブが開催されることもある。

そこかしこで若手芸術家トのバルも開催され、手軽な発表の場となっている。アーティストの連れている AI ロボットはもちろん斬新なデザインで、誰の AI ロボットが素晴らしいか丹波コレクションが開催されたりもする。コレクションは世界へ発信。ロボットユニバースも開催される。

丹波立杭の窯元が指導するニュー丹波焼きも人気で、サクラダファミリア的な丹波焼きハウスの建築が進む。高齢となった丹波焼きの職人の技も AI 技術で伝承され、若者とともに制作に携わりながら、後継者への指導も行っている。

子育て村は、子育て中の家庭が入村できる。中には子育てスペースが充実し、小学校や病院、相談施設があり、利用は全て無料となっている。さらに、子どもの食費は助成で賄えるようになっていて、親が無理をして働かなくても普通の暮らしはできるので、子どもの成長を見守ることができる。

（797字）

④まちのそこかしこが、リノベーションにより、サードプレイスーオフィスや創造的活動拠点、交流拠点（創造的界隈）ーに変身

30 年後のストーリー

昔の木造建築の空き家をリノベーションしたちょっと懐かしくて温かい雰囲気がある家が人気となる。リノベーションに丹波材を利用することで助成制度が使え、空き家はリノベーション前から注目されている。自ら DIY をして活用できるパッケージ販売やワークショップでも人気で、リノベーション後はサテライトオフィスや交流スペースといった共有施設として使われることが多いが、セレクトショップなどで開業する人も増えた。

暗い雰囲気のある自治会館も地域の人みんなでリノベーションするのが主流となっている。自治会館はコミュニティスペースとして広く開放され、地域の人だけでなく、週末丹波人も関係人口として丹波を訪れる人も気軽に集うサードプレイスができる。もともと避難所としての機能も有していたので、滞在希望者はゲストハウスとして使うこともできる。地域の人たちが野菜や卵を差し入れてくれるので、無料で簡単な料理もできる。

シャッター商店街は DIY で彩るリノベーション街となり、活気が戻る。人間味あふれる暖かな雰囲気からひきこもり相談や不登校の学生が立ち寄れる場所（ユーススペース）、子ども食堂にも活用。ネット環境も充実したいつ来てもいい、いつまでいてもいい、敷居の低い施設が充実している。（520字）

KPI:コワーキングスペース開設件数、空き家活用件数

⑤空の移動革命が現実に一丹波の空を eVTOL（電動垂直離陸機）が飛び交い、いつでも、どこでも行きたいところに行ける時代に

30 年後のストーリー

空飛ぶ車で移動がらくらくになっている。荷物の配送はドローンが担うので、山奥の 1 軒家でも毎日配送が可能。丹波の eVTOL 空港は丹波の森公苑のツリーハウスコロニーの中にある。コロニーに住む人は、地上に降りることなく、空飛ぶ車で東京まで今はほとんど見かけることがなくなったパンダを見に行くという。やっぱりバーチャルのパンダとは違うと話していた。

空の交通手段が賑わっているが、丹波の森で暮らす人々は自ら体を使うランニングやサイクリングが人気を博している。道路整備も進みどこでも自動運転が可能になり、併設されたサイクリングロードは電動キックボードや空飛ぶくつで移動する人も混ざっている。様々な移動手段の選択が可能となり、近場へは空飛ぶくつで移動、少し離れたところへは自動運転、さらに離れたところへは空飛ぶ車と用途で選べるようになっている。

さらに、アバターが空飛ぶ車に乗って、各地の名産品を購入に行き、道中に見たものが VR として本人が体験できるようになっている。昔に旅行した記憶と重ね併せて画像が送られてくるので、懐かしく楽しむことができる。

反して丹波地域には、車好きの人が自分で運転できる地域が残り、ドライブを楽しむ人が地域を越えてやってくる。ガソリン車が希少となり、ガソリン車のテーマパークが人気となっている。今はなくなってしまったミゼットも復元され、懐かしむお年寄りも多い。

（576字）

(2) 社会像〔例〕

⑥新農本主義（農(森)を中心とした暮らし、経済、社会）の台頭

30 年後のストーリー

丹波地域独自の農業だけでなく林業も含めた新農本主義が主流となっている。大型農家や企業が全自動化に取り組んでいる。集落営農では、スマート農業に取り組み、高齢化したメンバーもドローンの動きを見守る作業が増えた。水の管理もデジタル化が進み自動で行えるので、いちいち池の水の量を見に行かなくても済む。

週休3日が一般的になり、公務員も「半農半公」が可能になった。今まで地域の活動に二の足を踏んでいたが、進んで自治会長を引き受ける人もでてきた。おかげで市の施策と直結した取り組みもできるようになった。

農福連携も進み、誰もがらくらく農業に取り組める。パワーアシストスーツなども充実し、車椅子を使う必要がなくなった人が一緒に畑作業をする様子を見かけるようになった。気軽に土に触れる体験を始めてから、体の調子もよくなったと笑っている。

小規模農家は特徴のある野菜を作って EC サイトで販売している。有機農業でできた野菜は高値で取引され、大きさや見た目の悪さで敬遠されがちな野菜は地元の農家レストランで提供されることにより無駄なく使われている。野菜のくずも有機肥料として堆肥化され、地域内の循環が行われている。

食品を扱う企業は原料の栽培が義務づけられ、企業参入が進んでいる。二酸化炭素を吸収する森林を多く有するところには、税制優遇され、緑の少ないところは森林を整備するための税が課税される。

森林所有者が不明なところは、行政執行となり、共有地として地域で森の遊び場やログハウス別荘地の建設などで活用されている。

（640字）

KPI:農業産出額

⑦MORITEC（森、農、食、コミュニティ×DX）による新しいビジネス・サービスの創造ー「地産地創」「地創地産」の実践（人造肉、陸上養殖等）

⑧生産・サービス活動、空間管理の無人化、省力化、自動化の達成（無人農業、ロボット介護等）

30 年後のストーリー

コンビニは全て無人化。キャッシュレス決済となり、出口を通るだけで決済が済んでいる。スーパーも無人化が進みロボットが案内してくれる。普段はネットで購入、ドローンで配達となるが、急に必要なものができたときも安心な店舗は現存している。

介護施設も体位変換や入浴介助など重労働となるところは、ロボットが補助的に手助けをする。配膳や血圧測定や薬の配布などルーチン業務はロボットが行う。施設内の掃除もお掃除ロボットがするため、時間に余裕ができた人は緊急の対応と入所者とのコミュニケーションが主な仕事となる。

配送業は全自動化され、仕分けや配送も全てロボットとドローンが担当。海外からの輸入も直接取引となり免税が増える。

家庭の中にもロボットは多く活躍。お掃除ロボットはどこの家庭にも普及。階段の掃除や照明の傘までお任せできるようになった。毎日使うものは勝手に補充されるように管理され、トイレにいてトイレットペーパーがなくなったというトラブルは昔の映画で見るくらい。

農林業もデジタル化が進み、全自動化となり、丹波にも企業の参入している。山の管理もAI ロボットで管理しているため、野生鳥獣も人が住むところまで来ることがなくなり、山の新芽を食べ荒らす食害もなくなった。山麓で農家を営む家も鳥獣害被害がなくなって、畑を再開する人も増えた。

ロボットが家庭に入ることで時間にゆとりができた丹波の人は、自分のところの小さな畑で自分たちが食べる野菜を楽しみながら作っている。

（618字）

⑨シェアリング・エコノミーによる新しい循環型経済の成立－社会ストック、人材の共有化、デジタル通貨が地域の主軸通貨に

⑩関係人口を巻き込んだ「仮想コミュニティ」が担い手の源泉となり、地域自治・経営の基盤に

30 年後のストーリー

丹波出身者だけでなく、都市部の住民が丹波に「第二市民」として住民登録することができるようになった。帰省先を持たない都市部の住民にとっては、丹波が第2の故郷ともいえる場所となっている。

「第二市民」に登録すれば、空き家や古民家を改修したゲストハウスに安価で宿泊や長期滞在ができるほか、丹波に来るための交通費を行政が一部補助してくれるインセンティブもある。

その一方で、「第二市民」は、自治会の集まりなどにも参加が義務づけられるし、日役や祭り、イベント等にも参加しなければならない。自治会の集まりなどは平日の夜に開催されることが多いので、オンラインにより参加可能なものも多い。

今のところ、都市と丹波との滞在比率は7：3。地方税法が改正され、居住実態に応じて、住民票のある自治体と「第二市民」の自治体とで住民税を按分する制度ができた。居住実態の証明は、ICTを活用し、駅や公共施設、コンビニ等に設置されている端末にマイナンバーをかざせば良い。

丹波には自分を待ってくれる人もいるし、自分でも何らかの形で活躍できる場所と時間がある。だから私は丹波に足繁く通ってしまうのだ。

（479字）

KPI:観光入込客数

（3） 人間像〔例〕

⑪自然と共生する暮らし、農のある暮らし、食の豊かさを享受できる暮らしが基本に

丹波ブランド農産物に埋め尽くされた大区画の農地では、営農に必要な農業用水はAI が気温や日照時間などを分析して最適な水管理が行われ、都市部から丹波地域に移住してきた新規就農者のオペレーターはスーツ姿で出勤し、エアコンの効いた部屋でモニター監視を行いながらリモコン操作で農作業機械やドローンを巧みに操っている。また、消費者はパソコンのボタン操作一つで好みの食材を選択し、都市部に近い立地を生かした丹波ブランド農産物は新鮮なままその日の夕方の食卓に届けられている。

少し前の時代、丹波の農村地域は過疎化・高齢化・混住化が進行し、農業者だけでは農地の維持すら困難な状況に直面したが、農業者と地域住民の共同活動を推進する法制度を活用し、なんとか農地を維持してきた過去がある。

一方、地域住民との共同活動では地域の子供たちとの生き物観察会を継続的に開催するなどした結果、地域に古くから残る自然環境の保全や良好な景観の形成といった集落の健全性が次代への財産として引き継がれている。

一時期は農業に手一杯で生き物観察会や子供たちとのふれあいの場つくりが困難な時代も経験したが、先端技術を駆使した農作業の徹底した効率化を基盤とした当地域において、自然環境の保全と良好な景観のもと、地域全体が食の豊かさを享受できる暮らしを体感している。

（５５３字）

丹波はスローライフ及び自給自足できる地域をめざす。

子どもたちが丹波で暮らし続けようという意識を醸成するため、丹波ネット高校や大学・専門学校を設立し、丹波に居ながらも県内だけでなく、国内、海外ともオンラインでつながり、学びたいことを学べる環境を整える。

高校や大学などでは、環境や農業など専門性の高い技術を習得できる体験を多く取り入れ、丹波に根ざす人材育成につなげる。体験を通し、共通の関心や課題を持った若者が集うことで、若者のフロンティアが生まれ、数多くのコミュニティが形成される。また、若者が主体となり、地域の高齢者とタッグを組むことで将来の丹波を支える強固な土台が構築される。そのコミュニティは現在の自治体という枠を超え、「農業に特化した地区」「食に特化した地区」など、特色を生かした地域として発信していく。

その結果、テレワークで田舎暮らしを楽しむ人、本格的に農に参入する人など、それぞれのニーズに合った暮らしを求めた都市からの移住者が増える。また、その移住者と交流する中で、新たなコミュニティが生まれたり、さらにコミュニティが進化したりする。

（４７３字）

⑫多種多様な（有償・無償の）しごとの組み合わせにより自らのライフスタイルを演出

「働く」ことの意味が、「生活の糧を稼ぐ」から「自分のやりたいこと、得意なことをする⇒結果として対価を得る（得ない場合もある）」というふうに変わり、企業等への就職というよりも、自分の能力を活かす「しごと」を社会に提供するという形式になる。そのため、1日8時間を前提とする必要はなく、自分の思う時間だけ、細切れに「しごと」に使えるようになる。

必要とされる業務に対して、それを得意とする人が集まり対応する働き方が社会で一般的になっている。基本的に得意な分野の「しごと」なので、効率もあがるし、精神的にも負担が少ないうえに、その分野の能力がさらに伸びるという好循環が生まれる。

一方、自動運転技術の進歩により、移動中も会議をしたり、睡眠を取ったりと自由に使うことができ、都市部と郡部の実質的な距離は縮まっている。そのため、人々が過ごす場所を選択する際には、純粋にその土地のもつ魅力や自分の好み（趣味に合うとか、休暇を過ごしたい場所等）で判断している。

そんな時代の丹波地域は、距離面のデメリットがなくなるため、豊かな自然や農産物（旬の美味しいものが味わえる等）、文化（休日は窯元で陶芸等）等を求める人々が「暮らす」地域となっている。（「暮らす」と書いたのは、「住む」という固定的に居を構えることだけを言うのではなく、短期・長期に「滞在する」人を含める趣旨。）

自然が好きな人が里山に入り手入れをすることで自然は守られ、農業に取り組みたい人が従事することで品種改良等が進み、よりブランド力があがるというように、地域に魅力を感じる人が集まり、そこに手が入ることで、より魅力が増すという好循環が生まれる。（この流れは他地域でも起こっているため、地域ごとに個性・特色が際立つ、“カラフル”な時代となる。）

このように人々は、自分の時間を、自分の好きなように、様々な活動に使いながら、充実して暮らしている。（790字）

⑬シビックテックを駆使し、価値創造に挑むイノベーターとしての市民（もりびと）輩出

⑭多国籍チームによる地域課題の解決ー世界の叡智を丹波に結集（丹波の森大学のグローバル化推進）

丹波の森大学と連携した「丹波版 CCRC」と呼ばれるこの地域では、丹波の森公苑にシニアと学生の笑い声が聞こえてくる。丹波の森公苑内の芝生広場ではシニア学生と現役学生が企画したイベントに近隣の幼稚園児が集まって、ドローンを飛ばしている。ドローンの操作を教えているのは、都市部からの移住者で元はエンジニアだ。また、森公苑のセミナールームでは、地元の小学生と丹波を拠点にまちづくり活動に取組む大学生がオンラインで交流している。

「丹波版 CCRC」では健康な時から地域の空き家をリノベーションした“シェアハウス”に住み、介護になっても移転することなく継続的なケアが保証されている。居住者の健康管理のために、県立丹波医療センターと連携した健康ビッグデータ解析、予防医療、食事がプログラム化されているだけでなく、丹波の森大学と連携した生涯学習、地域におけるスポットでのしごとや自治会活動への参画などが緻密に組み込まれている。

これにより、多くの雇用が発生し、以前から地域の課題となっていた高校卒業した若者が地元から流出することはなくなった。

丹波版 CCRC は日本版 CCRC の受け売りではなく、国籍に関係なく、多世代が集い、学び、働き、住まう。居住する人の健康寿命が伸び、地域の担い手となり、丹波の森全体を丹波の森大学のキャンパスに見立てた地域は生き生きと輝き、安心して暮らしている。

（565字）

⑮自然環境リテラシーと科学リテラシーの双方を高める教育の実践によって、感性と知性のバランスのとれた人材を育成

⑯100 歳超のシニアが AI、ロボットの助けを借りて現場の第一線で現役として活躍

医療の進展等により、寝たきり生活や認知症がなくなるなど、健康寿命が大幅に延伸し、多くの人が100歳まで生きられる「人生100年時代」を迎えることとなった。

また、AIやロボットの発達により、いくつになっても働くことが可能になるとともに、なにをするかというところを人間が決め、中間処理をすべてAIに任せることにより、自由時間が増加し、生活に余裕ができることにより、地域活動やボランティア、趣味等の余暇活動を好きなだけ楽しむことができることとなった。

ロボット等の活用により、農作業が全て自動化され、耕作放棄地がなくなるとともに、丹波の黒豆や枝豆、栗などの特産物の大量生産が可能となり、ドローンや自動運転飛行機の活用により、全国への出荷にとどまらず、海外にも大量輸出され、住民の所得が向上した。

また、丹波の特産品の美味しさを知った外国人が大量に丹波を訪れるとともに、自動翻訳機の活用等により、住民とのコミュニケーションが活発となり、国際交流のメッカとなった。

余暇活動時間の増加に伴い、シニア層がITを活用し、長年培ってきた知識や経験を若者に伝える伝道者として活躍し、若者とシニア層のコミュニケーションが増加し、地域全体が活気に満ちた街となっている。

（５２０字）

様々な側面から健康が支えられるようになり、健康寿命が大幅に延伸したことで100歳まで生きられることが当たり前に。これにより、好きな仕事で現場の第一線で活躍し続けられるようになった。栗や枝豆といった特産物はいつまでも作り続けたいけど体力が心配。でも力仕事や緻密な作業はロボットが代わりにやってくれるので問題なし。いつまでも仕事ができることは生きがいでもあるし、仕事を通じて人と人が関わり合うことで、地域も賑やかになる。

亀の甲より年の功。先進技術が発達したからこそ、先人が残してきた技術や経験は継承していくべきもの。丹波焼の窯元はAIのサポートにより引退という概念がなくなり、その技術や経験が継承され続けている。丹波の森大学では、100歳超えの丹波人が丹波の生き字引・丹波の歴史証人として、丹波の素晴らしさを語っている。先人の知恵と先進技術が融合することで、新しくも深みのある社会が見えてきた。

衣服も進化している。生体機能を有する服が登場し、身につけるだけで適切な体温に調節してくれ、代謝を促進してくれる。感覚器官の衰えを補い拡張する服も誕生している。例えば高齢者の熱中症はこの服で解決され、四肢に麻痺を抱える人は日常の動作がスムーズに行えるようになっている。

日々の居住空間を通じて健康に関する情報が収集されることで、健康管理されている。ベッドでは心拍数、呼吸、発汗などが、トイレでは排泄物の成分がデータとして蓄積され、丹波医療センターの医療データベースに送信。そこで日々の変化が管理されている。もし健康に異常があれば通知が来て、かかりつけ医へのスムーズな相談へとつなげられ、早期発見早期治療ができる。

（６９９字）

KPI: 丹波地域在住者の健康寿命１００歳

その他のストーリー

テーマ　甦る豊かな自然

里地・里山や人工林の適正管理、動植物の生息に配慮した河川等が整備され、環境保全活動団体や地域住民が環境保全活動を積極的に実施している。その結果、オオムラサキ、ホトケドジョウ、バイカモ、クリンソウ等の貴重種が生息する豊かな自然環境が保たれている。

里山林や河川等を活用し、人材の育成や体験型の環境学習が行われ、都市部の県民が豊かな自然環境に触れ合うエコツーリズムが実施されるとともに、環境保全活動団体の担い手の育成に繋がっている。企業の CSR 活動による生物多様性保全活動が一般的となっており、地域の環境保全活動をサポートしている。

人工林の間伐材など森林資源がバイオマス資源として利用され、バイオマス発電で得られた電力による電気自動車の活用など、環境に配慮した生活や事業が営まれ、エネルギーの地産地消が成立している。

人と野生動物の棲み分けや GIS（地理情報システム）・ICT（情報通信技術）を活用した野生動物の保護管理により、シカやイノシシなど野生鳥獣による農作物や森林への被害が減少している。また、環境 DNA 技術を活用し、生物種を効率的に把握することにより、希少種の保護や外来種の駆除が行われ、在来種による生態系が維持されている。

プラスチック製品の使用削減、バイオプラスチック製品の利用促進、廃プラスチック製品の回収等により、源流地域の丹波地域から河川を通じて、海域に流れ込むプラスチックゴミ量は減少している。

（６０５字）

テーマ　進むインクルージョン

自分らしさを追求できる社会が浸透し、様々な人が自信を持って暮らしている。

一昔前までは、女性は自分の意思で人生を決めることもままならなったと言うが、女性の政界進出も進み、今やどこの地域でも半分程度が女性？である。

女性？という性の捉え方をすることも減っているが、出生時の性で言えばということにしておく。

さらに、外国人の候補が自動翻訳機の力を借りて選挙演説をしている姿をみかける。議会といえどもオンラインで開催されているため、ベッドからでることのできない議員も自分の意見を発信している。たまに、高齢議員が昔はこうだったと言うが、孫世代の若い議員に諭されて、新しい技術を取り入れることになった。

LGBT の人も、自身の性を負担に感じることなく生活ができるようになり、学生服も自分が好むものを着用できるようになり、見ためが男性の子がスカートをはいている姿も見かけるようになった。就職活動の時は、自分が主張する性別で受験するのがあたりまえ。の社会となり、誰もが自由に生きやすくなった。

丹波は昔からひきこもり支援が充実していた。丹波篠山市の結に通っていたひきこもり経験者はプロゲーマーとして名を馳せ、誰もが気軽に立ち寄れるサードプレイスと自立相談室を開設し、地域への恩返しと言う。

弱者として扱われていた高齢者はパワーアシストスーツや自動運転、介助ロボットの流通で、多くの経験をもつアドバイザーとして重宝がられ、AI への情報提供に忙しい日々を送っている。

（６１２字）

テーマ　支援を必要とする人が支援者としても活躍する

高齢者、障がい者は日常生活面で支援を必要とする場合がある。

一方で、心身機能の低下や制約により、他者へ支援を提供することが困難なことがある。

つまり、支援を受けることが多く、支援する側にたつことが少ない。

同じ痛みや悩みを体験した人がピアサポーターとして活躍する動きが今でもある。

しかし現時点では、支援を必要とする現地まで身体的に移動するか、一定程度の IT 活用知識を持った人なら Zoom 等により遠隔地から WEB を通じて情報提供等行うことができるが、それらがかなわない人は活動への参加が難しい。

しかし、高齢者や障がいのある人の経験、知識、考えは後生の財産である。

30 年後の丹波地域ではそれらをサンプリングして、必要とする人に AI が渡し届けるようになっている。

誰かの力になりたいと思っている人がその人の脳の記憶を提供し、データ化（個人情報から一般化へ）することにより、様々な情報提供を行い活躍することができる。

相互のニーズの一致にはまたもや AI がマッチングをはかる。

利用する側は、欲する情報の提供を受けるだけでなく、他の人の脳のデータ化された記憶を映画のように追体験することもできる。

提供する側はデータ化された自身の経験や知識を社会のために生かせる。

AI 技術と個人の経験や知識を結びつけることにより、30 年後の丹波では高齢であっても障がいがあっても活躍することが可能となっている。（574 字）

テーマ　丹波地域のヒト・モノ・コトの情報、仕事のマッチングシステムの充実

今後、丹波地域でも限界集落が増え、所有者が不在・不明・あいまいな農地や山林が増えるだろう。しかし、30年後には、シェア・レンタル農地・山林として活用、管理できる仕組みが出来、農村集落での体験や学びの場が増加している。

丹波地域には大規模な企業的経営が増加している。ほ場や水の管理は、カメラと管理アプリで常にスマホ確認、遠隔操作が当たり前になっている。病害虫や肥培管理、収穫作業の多くが、ドローンやロボットによる機械作業。草刈りも一定以上に伸びると自動レーザー照射で簡単になっている。あらゆる分野の農の匠の技もデータ蓄積され、作業の適期もスマホアプリが知らせてくれる。果樹剪定も「匠の眼鏡」をかければ、切るべき枝がわかる。これら機器は、大規模経営だけでなく、小規模な営農組織や兼業農家でも利用されている。

農業経営者間での連携だけでなく、地域での人材や機器のシェアやレンタル等の仕組みができ、異業連携があたりまえになっている。建設業や観光業、メーカー等、繁忙期の異なる会社で人材や機器を多角的に利用、シェアすることで、年間雇用、一時雇用、過剰投資を回避して、儲かる経営が実現。働く人も組織に属す人が減り、自由で様々な働き方が可能になっている。

誰もが未来の地域産業へ応援・投資が手軽にできる。応援はポイント化され、丹波地域でポイント利用ができる。投資には収益配当等など特典が設けられ、機器の開発や導入を促進する仕組みができている。企業や個人は、納税義務の内、一部を納作業に変えることができる。農村での草刈りや溝掃除、収穫作業、村まつりへの参加等、地元事業者や集落が募集する作業に従事する。

上記のことを進めていくために、丹波地域には、ヒト・モノ・コトの情報、仕事のマッチングを担う地域商社あるいはシステムが開発されている。この地域商社あるいはシステムは、子供達の職業体験や観光の予約・申込み機能も持っている。親の納作業と子供の職業体験を同時に行うと、応援ポイント加算など地域応援や誘客、丹波地域への縁をもつきっかけづくりが多様に複合的に仕組まれている。子供達の様々な職業体験は、人材育成につながっていく。

（897 字）

テーマ　快適になる移動　引き継がれる風景

　てんぐす病の予防・治療方法が確立し、桜の寿命が100年を超えることも珍しくなくなっている。四季を通じた、桜の3D立体映像により、時間、場所、天候、花粉等を気にすることなく、人々は「たんば桜づつみ回廊」を愛でることができる。元々あった桜が枯れて無くなってしまい、桜は復活させたいが、手入れをする人手と予算が無い場合には、3Dプリンターにより、桜のコピーを現地に設置することもできるようになっている。

　「街道」訪問がブームになっており、〇月〇日の「たんば三街道の日」には、全国各地から街道マニアが丹波に集まり、丹波の名産品や「たんば桜つづみ回廊」を大いに楽しむ。

　自動運転可能で免許不要の「電動アシスト自転車」が日常生活における人々の足となっており、管内のすみずみまで整備されたサイクリングロードを使って、気軽に行きたい所へ行けるようになっている。もちろん、「街道」訪問もこの「電動アシスト自転車」を利用して行う。

　「電動アシスト自転車」は、管内のJR駅で、スマホさえ持っていればいつでも（駅が無人でも）借りることができ、使用後は、どのJR駅で、いつ返却しても構わない。使用料金は、スマホに内蔵されたGPS等により、使用時間と距離により自動で計算され、課金・徴収される。

（５２８字）

テーマ　丹波地域全体でのコンパクトシティが実現

　人口減少により交通インフラなど社会資本の老朽化への広範囲な対応は困難となり、集約と効率化が進むことで丹波地域全体の新たなコンパクトシティが実現している。城下町篠山の伝統的まちなみを形成する地域や日本六古窯の一つ丹波焼の窯業集落などの、歴史的まちなみや美しい景観・田園風景等を保存・継承する取組は一層深まり、丹波地域ならではの魅力が際立つ地域づくりが浸透している。

　コンパクトシティの実現により地域の課題であった医療や福祉は充実し、中心となる市街地は活力ある経済を取り戻し、郊外の環境保護にも寄与するまちづくりが進展している。定住が進むまちの中心では、自動車にかわる新たな次世代モビリティが安心かつ快適な暮らしを実現し、さらには、健康産業の著しい発展により医療機器の進化が人々の身体機能をサポートすることで高齢者等が自由に移動し活躍する時代が到来。

　まちの活力を維持しながら生活環境の課題を解決するため、丹波の特徴ある農業のあり方も変容している。まち全体の再整備により農地は新たに郊外に整備され、その維持管理を含む営農は、デジタル技術、AIやロボットが台頭することで、技術革新による自動化が格段に向上し、人が関わらなくなっている。

　こうした住環境の見直しやQOLの向上により、従来、労働に費やしていた時間を人々は余暇や自分時間として活用し、地域を支える文化、芸術、観光などの分野に多くの人が関わることで、活力ある新しい暮らしのかたちが定着している。

（　620　字）

テーマ　なし

丹波地域は、ペットを家族の一員としてとらえた社会構造が広がり、週末は、丹波で余暇を楽しむ方々で賑わっている。

多くの飲食店では、ペット同伴が認められ、ペット用のメニューも充実している。さらに、ペット同伴を認めた宿泊施設やコテージ、観光施設も充実。景色の良い場所でのドッグランの整備も進んでいる。

ペットがいると旅行はなかなか困難なものである。しかし、丹波地域では、ペット同伴による障害が少ないだけでなく、ペットとともに日常を楽しめる環境が充実しているため、多くの利用者がリピーターとなり、週末のひとときを楽しんでいる。さらに、来丹者からの口コミ情報により、新たな来丹者が増えている。

来丹者の増加に伴い、受け入れ施設も増加。新たなサービス（しつけ方教室やペットサロンなど）も充実し、それに伴う雇用も増加している。また、週末、丹波地域を訪れた方が、直売所等で新鮮な野菜や畜産物、地元ならではの加工品をたくさん購入することから、農産物等の作付け面積が増加するなど、地域農業も少しずつ活性化してきた。

さらに、丹波地域の住民に対しては、高齢世帯でもペットを家族として迎え入れられるよう、もしも飼えなくなっても、学校や公共施設、高齢施設等での受け入れや、次の家族が見つかるまで、もしくは最後までの看取りなどをサポートする体制も充実。ペットにより生きがいを見つけ、元気な高齢者が増え、介護等による悲しい話も減り、地域全体も活性化してきた。

最近では、人にもペットにも住みやすい町として広く知れ渡り、滞在だけでなく、移住・定住を目的に丹波地域を訪れる方が増えてきた。

KPI:観光入込客数、移住者数調査、

（672 字）